慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会と境遇及天然
Sub Title	
Author	河邊, 治六
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.2, No.4 (1909. 11) ,p.237(1)- 250(14)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19091101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

廣告主へ御注文の節は三田學會雜誌廣告によるの旨御附記を望む

經濟學全書

編輯總理 東京帝國大學教授法學博士 和田垣謙三先生　編輯幹事 東京日々新聞主筆 本多精一先生

編輯幹部

編輯擔任
東京帝國大學教授法學博士 河津遲先生
東京帝國大學教授法學博士 高野岩三郎先生
中央大學教授法學博士 桑田熊藏先生
慶應義塾大學教授法學博士 福田徳三先生
早稲田大學教授法學博士 山崎覺次郎先生
慶應義塾大學教授法學博士 鹽澤昌貞先生

申込注意
全輯卅六卷第一卷本月上旬刊行製本裝釘には特別裝釘普通裝釘の二種あり御申込の諸君は全輯及第一、第二輯（廿四卷）は特別三圓普通二圓第一輯は特別二圓普通一圓の申込保證金額御送附を乞ふ

確定書目刊行

「稅制問題」慶應義塾大學教授 堀江歸一先生
日本財政論 京都帝國大學法科大學博士 神戸正雄先生
株式會社問題 東京高等商業學校講師 瀧本美夫先生
稅制整理問題 早稲田大學教授 田中穗積先生
支那貿易問題 編輯叢書 河津遲先生
海運及航海論 東京高等商業學校教授 堀光龜先生
工場法と勞働保險 編輯擔任 桑田熊藏先生
勞働者保護論 東京高等商業學校講師 關一先生
殖民經濟論 慶應義塾大學教授 堀切善兵衛先生
カーテル及トラスト論 慶應義塾大學教授 氣賀勘重先生
產業組合 東京法科大學教授 矢作榮藏先生
中央銀行 編輯叢書擔任 山崎覺次郎先生
國民生計論 編輯叢書擔任 鹽澤昌貞先生
明治の經濟政策 早稲田大學教授 平沼淑郎先生

以下各種問題逐次刊行◉詳細說明書郵券二錢送付次第呈上ず

發兌元 東京京橋區鍋町二の二 振替口座東京八五三番 隆文館

三田學會雜誌　第二卷第四號

論說

社會と境遇及天然

河邊治六

一個人に心意あるが如く、社會なるものにも亦心意ありとは人の多く論ずる所なるが、其社會心意とは果して如何なるものなるや、其內容實質果して如何、又各國人の心意外に社會心意なるものの存在するや否や、是等は大に研究すべき問題なりとす。然れども本論に於ては、社會心意は事實に於て存在するものと假定し、社會心意と其外部の境遇との關係に就き論辯する所あらんとす。

社會の性質は多く社會心意なるものに依て定めらる、然れども社會心意なるものは外部の境遇の影響を享くる事亦大なり。而して社會心意なるものゝ外部に發表するに當つてや、必ず有形なる事物の作用を藉らざるべからず。吾人の思想感

情は言語筆紙擧動を藉るに非らざれば是れを人に知らしむる事能はず。言語筆紙等は吾人の思想に必要なる物的條件なるが如く、社會に於ても、社會心意なるものは、形體の作用を藉らずして發表し得るものに非ず。卽ち社交的の目的を以て設置せられたる制度建築運輸交通機關等は社會心意發表の物的條件なり。是等の有形事物は社會心意なるものゝ感ずる所、欲する所、考ふる所の發表たるに外ならず。斯く論じ來れば、社會心意と其物的條件とは二者獨立して存在するが如く考ふる者無きにしも非ず。然れども個人に於て其心意と形體との活動を區別する事能はざるが如く、社會に於ても此二要素は兩者相俟つて初めて存在するものにして、社會心意と其物的條件とは各々獨立の存在を有すと考ふるは大なる誤謬たるを免れず。

人類社會と動物の群居せる狀態とを比較するに、前者に於ては心意活動の範圍、物的活動の範圍より大なり。元より或種の動物の如きは組織ある集合團體をなして棲息すれども、其集合體の意思なるもの、是れを人類社會の意思に比較すれば、劣等たるを免れず。人類の大事業なるものは皆協同的社會的の活動に外ならず。

若し人類にして各自孤立して棲息したらんには、禽獸を隔る遠からざるのみならず、或はある種の高等動物よりは其體力に於て、又感覺力に於て劣る所なきにしも非ず。物質文明の進歩と云ひ、學理の發見と云ひ、皆是れ人類の思想交換の結果に外ならず。國家の繁榮、軍備の充實、富の增加、生活程度の向上とを、人或は之れを以て物質的進歩發達の結果となせども、此等の物的變化の原因は社交的心意の變化に在りと云はざるべからず。換言すれば一個人の思想が他人の思想に反應して生じたる結果に外ならず。カントは一生キニクスボルグを出でたる事なくして、世界の思想を一變し、間接に其結果は政治界産業界に偉大なる影響を及ぼしたるが如く、又十七八世紀の際歐洲に勃興したる自由思想は今日世界各國産業隆盛の基礎となりたるが如き、皆是れ社會心意活動の結果に外ならず。

既に述べたるが如く、社會と其活動に伴ふ物的條件とを區別せざるより、社會の性質を誤解する事多し。更に詳細に此の理を論せんに、人と人と接近するは社會を組織するの一要件たれども、接近其物は社會に非ず、接近は單に社會を組織するの機會を與ふるに過ぎず。一生軒を並べて同所に住居するも若し相往來せざる

に於ては、其間に社交的關係無しと云はざるべからず。此問題と聯關して起る一疑問は、家族なるものは一の社會と見做すべきや否やとの問題なり。是れに對し正解を與へんと欲せば、家族なるものを二種の見地より觀察せざるべからず、家族は一方より見れば一種の生物的關係にして、又他方より見れば一種の社交的關係なり。夫婦父子子孫の關係は人類を永續せしむるに必要なる生物的關係なれども、又是れと共に親愛なるもの存在し其の社交的關係を形成す。故に生物的關係は家族の社交的關係を生ずる基礎たり且つ條件たれども、生物的關係を有すればとて必ずしも社交的關係を有せりとすべからず。元より前者は物質的關係にして、後者は心意の關係なるは勿論なり。今假りに三人の兄弟ありとするに、甲は北海道に移住し、乙は臺灣に赴き、丙は鄉里に留まり、其間音信不通となりたる場合には社交的關係は斷滅したる者と云はざるべからず。然れども三者の生物的關係は距離の如何に係らず消滅し得べき者に非ず。故に生物的血族關係と社交的關係とは其範圍全く相異なり。又國家に於ても、其社交的作用と物的條件とを區別せざるべからず。領土官省軍艦砲臺等は國家の本體に非ずして、其社交的活動をなす物的條件即ち手段たるに過ぎず。國家の本質的存在は是等の有形物に非ずして心意の社交的活動に在りとす。換言すれば一國家を組織する成員相互間に於ける或る種の心的關係を指して國家と云ふなり。

已上家族及び國家に就て述べたる物的條件及び心的活動の二要素は、其他の社交的團體に於ても必ず具有せざるべからざるものなり。例へば學校會社寺院等の如きものに於ても有形無形の二方面を有せざるもの一として之れあらず。此二要素中無形なる心意的社交的活動は學校會社寺院等の本領にして、其使用に供せらるゝ土地建築器具等は心的活動の手段たるに過ぎず。

斯の如く社會なるものは物質世界を離れて存在する事能はざるものなるが故に、天然と常に密接なる關係を有し、其偉大なる感化を享くるものなり。然れども天然の社會に及ぼす影響たるや直接に來るものに非ずして、必ず先つ個人を感化し、從つて社會に影響を及ぼすものなり、各個人の性質思想感情職業健康等は天然界の物質的境遇に制せらるゝ事大なり。故に個人の集合體なる社會は間接に外界に制せられざるを得ず。或種の天然力の如きは、其影響を及ぼす範圍廣大にし

て一民族或は一大陸に普及る事あり。例へば日本人の或特殊の氣質の如きは、我國の風土に依りて形成せられたるものなるが如し、所謂日本人の島嶼的氣質なるものは此種の一例に外ならず。然れども天然の人類に及ぼす影響は多くは千古不易なれども、人類の天然を應用するの能力に至つては時と處とに依りて大に異なり。外界の遇境に適合するの能力は人類の下等動物に勝る所以にして、熱帶と寒帶とを問はず天然を征服し、是れを利用し、以て自己の生命を維持し、幸福を遂及するの能力は人類特有の長所なりと云はざるべからず。

社會と天然の關係を論ずるに當り二個の偏頗なる說あり。一は極端なる唯心論にして、人類の心的作用を誇大視し、物質的要件を無視す。之に反し極端なる唯物論は物的條件を重んじ心的作用を無視す。唯物論に依れば人類は一種の心靈的實在、心意的勢力にして自己の觀念と目的に從つて活動の方針を定め、外界の影響を蒙らずして、却つて萬物を自己の目的に從つて征服するものなりとなせり。

而して心靈を重んずるの結果、現世を以て來世の準備となし單に來世の準備としてのみ價値あるものとなせり。且つ物質を以て罪惡の根源となし、天然界の支配を離れ、其勢力已外に立つを以て品性を高め、心靈を修養する唯一の方法なりと思へり。此種の思想は古來宗教及び哲學に偉大なる影響を及ぼせりと雖も、今日に於ては殆んど其勢力を失ひたるが故に、近世思潮に接觸するものは人類社會の物質的及心靈的の二要素を認めざるもの稀なり。

前世期已來自然科學の發達と物質文明の進歩との結果として、或る一種の社會に唯物論を主張する者あるに至れり。彼等は人類を以て萬物の靈長に非ずとなし、却つて人類を以て萬物の奴隷となせり。彼等の說に依れば、人類を以て萬物の長なりと考ふるは人間の虛榮心に外ならずと。此派の人は心理學を以て生理學の一部分に過ぎずとなし、又意識作用は神經系統の作用に外ならざる者とし。且つ人間とは卽ち其人の食へる物質に外ならず、肝臟の膽汁を分泌するが如く、腦は人の思想を分泌するものなりと。此種の唯物論に依れば、個人民族國家人種等の特質は土地風土等の物的條件に依つて必然的に形成せられたるものなりとなす。

蓋し此說は外界の勢力に對する人類の反動、及び是れを利用するの能力を無視せるものなり。卽ち或程度迄は、人類の天然に依賴する事實を誇大して、人類は全

然天然に支配せらるゝものとなせり。然れとも次の如き事實は彼等の立脚點より説明する事甚だ困難ならん。即ち獨逸帝國の勃興せるが如きは、天然の富源に負ふ所少なく、却つて人力を以て瘠地を化して豐饒なる田畠となし、危險なる海岸を化して安全なる港灣を作り、運輸交通の途を拓き、天然を征服して産業を振興せしめたる次第なり。又アイスランドの中世文學を讀むものは其當時に於ける文藝の發達に一驚を喫せざるを得ざるべし。而して彼等の文明は寒帶の嚴烈なる氣候と奮闘して得たる結果に外ならず。輓近物質文明の盛なるに依るや、人類は天然を利用する能力ある事を高調するもの少なく、人類を以て天然の奴隷となす者多し。而も此説の誤謬たるや毫も多辯を要せざるも更に一例を擧げて之れを證せんに、彼の全盛時代に於けるグリーキ人も、今日の該國民も、共に同一自然の影響を蒙れども、何故今日のグリーキ人は古代に劣らざるの文明を再現する事能はざるや。是れ唯物論者の見地より説明する事能はざる所なり。

天然の人類に及ぼす影響は人の職業及び生活狀態に依りて異なり。農夫は學者よりも天然に依賴する事多し、人類の原始的生活狀態に於ては殆んど全部天然

に依りて左右せられたり。即ち人心未だ開發せざりし時期に於ては殆んど全部物質的境遇に制せられたり。換言すれば原始的社會に於ては人間も天然の一部分たるに過ぎざりしなり。而して天然なるものは必ずしも一定不變のものに非ずして時代の變遷と共に其形體に變更を生じ、其結果天然の人類に及ぼす影響も亦多少の變化を免れざるものなり。然れども天然の變化たるや多くは人力に依りて成れるものなり。而して天然の變化と共に人類社會に變遷を生ずるに至りしは論なし。然れども天然の變化と社會の變遷とを比較するに、前者の遲々たるに反し、後者の變化の速かなるに驚かざるを得ず。即ち初期に於ては天然に制せられたる人類は、智力の發達に依りて、徐々に天然を利用するに至れるなり。昔時に於て人の是れに對し恐怖の念を懷ける山河森林海洋等は、人智の進歩と共に生活に必要なる材料を給するに至れり。斯く人類の發展して天然より獨立するに至るは、恰も小兒の成長して父母の膝下を離れ獨立自營するに至るが如し。衣食住の如き自然的必要物は人類進歩の障害に非ずして、却つて發明を促すの動機たるなり。即ち未開の時代に於ては、人類は殆んど人力を用ゐずして食物を産する

地にのみ棲息するを得たれども、農業の發達に從ひ其土地の產物を變更し、是れを需要地に運送するに至る。未開の時に於て人類に害を及ぼせる風力電氣力の如きも、之れを船舶を走らすに用ひ、或は機械を運轉するに使用するに至る。斯くの如く天然は殆んど其狀態を改めざるに反し、人類は是れを利用して非常なる發展をなせるなり。即ち昔日に於ては萬有の奴隷たりし人類が、今日に於ては萬物の長たるに至りしなり。斯く人類の發達せるは其智力の發達に依れるなり。體格より論ずれば野蠻人は却つて文明人に勝る所なきにしも非ず、機械の發明は腕力を要する事、未開時代に於けるが如く大ならざるに至れるを以て、文明人の體力は退歩せざるも、更に進歩せざるなり。未開人と文明人との身體の構造を比較するに、其最も著しき差別は腦の內部の構造に在りとす。之れに反し高等動物と下等動物との身體の構造の差異は筋肉及び骨質の外形的組織に在りとす。

天然は直接に身體に影響を及ぼし、又身體を介して間接に心意に影響を及ぼすものなるが、文明の發達と共に其影響益々薄弱ならんとする傾向あるは既に述べたるが如し、然れども天然の支配を免るゝに從ひ、人類は遺傳の勢力に服するものにして、人生の成敗は或る範圍內に於ては遺傳に依りて決定す。此遺傳なるものは其本質天然の影響と相反するものに非ずして、祖先に及ぼせる天然の反響の結果に外ならず。遺傳の原因たるや、吾人の觀察の及ばざる所に在り。或特質が父より子に如何にして傳はるものなるや、父母の性質が如何にして子の性質內に於て混合し得べきものなるや、又人爲的にある性質を遺傳し得べきものなるや等の問題は人智の未だ及ばざる所なり。故に遺傳問題を論ずるに當つては、單に大體の傾向に就て論ずるに止まり、特殊の問題には嘴を容るべからず。大體より云へば、强壯なる父母には强壯なる子あり、薄弱なるものには薄弱なる子あり。又道德上より論ずるも、父母の性行を子孫に遺傳するは勿論なれば、數十代の間間斷なく遺傳作用を反覆すれば、遺傳の人類に及ぼす結果又大ならざるべからず。或種の性質は果して遺傳に依るか、將た外界の境遇に依るかを識別する事能はざる場合多し。特に心意の特性に於て然りとす。今茲に一大畫家ありとせんに、若し彼れに幼年時代より彫刻家たるの敎育を受けたらんには、彫刻家としても亦頭角出現はずの人物となりたるやも知るべからず。故に是れを概言すれば、天禀の才能は

遺傳に基き、其の天賦の才を發育するものは外部の境遇に在りとす。

人の生るゝや、遺傳に依りて祖先より享けたる身體及心意の性質を以て基礎となせども、其天禀の材能を發育するに當つては、土地風土食物等に依りて偉大なる影響を蒙るものなり。土地の平原なると、山岳なると、瘠地なると、豐沃なると、內地なると、海邊なるとに依りて生活狀態を異にす。氣候に於ても、寒帶なると、熱帶なると、乾燥なると、濕地なるとに依り文明の發達を異にす。文明の起源は必要なる食物を豐かに產する地方に非ざれば發生する事能はざれども、一旦文化發展の途上に在るや、天然の供給豐富度に過ぎ、心身を適度に刺戟せざる熱帶地方に於ては、高尙なる文明を見る能はず。印度及埃及が古代に於て當時の先進國たりしも、一定の限度に達したる後は、更に發達を見ざりしは、蓋し此理に外ならず。之れに反し寒帶地方に於ては、日常生活の爲めに全力を注がざるべからざるが故に、生活狀態を向上せしむるの餘裕なし、故に勞せずして天然より豐かに衣食住の供給を受るが故に、努力して我が能力を發展せしむるの刺戟の存在せざる所、及び生活の爲め間斷なく努力と思想とを奪はるゝ所に於ては人文の發展を見る能はず溫帶地方に於て、學術の進歩と見、產業の振興を見るは此理に外ならず。蓋し溫帶に於ては、熱帶に於けるが如く、勞働せずして收獲を得るが如きは望むべからざれども、適宜の勞働に依りて報酬を得、且つ前途に使用するの目的を以て貯蓄するの精神を奬勵すればなり。

地勢と社會との間に密接なる關係あるは否定すべからざる事實にして、人口の增加と文明の進歩と共に兩者の關係益々密接なるに至る。地勢の經濟上及交通上に影響を及ぼすは多言を要せずと雖も、尙二三の例證を引用せんに、古代埃及の隆盛なりしは、單にナイル河の恩澤のみに非ずして、地勢上三大陸の中心に位したる結果なりとす。異なる民族に接觸し得るの便宜を有する地方は、他國の文明を輸入し、且つ自己の文明を他國に傳播するの便宜を有するものなり。又舟棹の便ある大河、若しくは航海に便宜なる海洋を有する地方は進歩發達し易し。昔時フイニシヤ國人は航海術に長じたるは其國の天然の位置を利用したるに外ならず。亞非利加の西海岸に古來海運の開けざるは、港灣少なく、風波荒きに依らずんば非ず。昔グリーキ、ローマの天下を統一せる所以及び今日英國の海上に覇たる所以

は皆之れ天然の地勢を能く利用せるによるなり。

是れを總括するに、社會は天然に依賴し、之に依りて制限を蒙れども、又一方に於ては、社會は智力を以て天然を征服し之れを使役す。人類の進歩は天然を人類の支配の下に置くに在り。即ち社會の安寧幸福の爲めに天然力を利用するに在り。斯くして利用せられたる天然は、人類の思想を發表するの機關たるなり。下層の文明に於ては、人心は天然を模倣し、其反應を受くるに過ぎざれども、文明の進歩と共に天然は却つて人心より反響を受くるに至るなり。(完)

上總介忠輝

阿部秀助

一

上總介忠輝は德川家康の第六男(一)母は茶阿局として、其初め遠州金谷の賤しき者の妻なりしが、容姿麗はしかりしを以て、處の代官が無體の戀慕に逢ひ、剩つさへ夫を殺さるゝに至りしかば三歳の幼女を抱きて濱松城に訴へぬ、家康之れを留めて、自己の召使となし、やがて其腹に宿りしものは彼忠輝なりき、(二)生れし際色きはめて黑く、皆さかさまに裂けて(或は孤眼とも云ふ)いと醜かりしかば家康之れを憎みて、自己の子にあらずとなし捨てんとせしを皆川廣照乞ふて養ひ辰千代と名けぬ(三)忠輝七歳の時、家康之れを見て、おそろしき面魂かな、三郎(岡崎三郎信康)が幼かりし時に、違ふ所なかりけりと云しとかや、行末彼が悲劇の運命は、はや此の語中にあり。(四)